
特殊 1 課

紫 胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊1課

【Nコード】

N5998X

【作者名】

紫 胡蝶

【あらすじ】

特殊1課

それは、この会社以外は存在しない不思議な課である。

その課に配属されるには

「一発芸を披露し面白ければ配属が認められる」と云う
良く判らない配属の認定方法によって決められると噂される
なんとも怪しい存在の特殊1課は

その会社では都市伝説のような扱いで囁かれており
本当に存在するののかも怪しいと思われる課である。

そんな特殊1課の真の業務内容を一般の社員たちには公には知らされて
いない。

そんな少数精鋭の特殊1課の物語である。

その1

「特殊1課に配属にされるには、一発芸を披露して、それが上の人間が面白いと認められたら配属が認められると聞いたのですが、瀬良さんはどのような事をされたのですか？」

「特殊1課」という課から応援で来たという瀬良忍せらしのぶに酒井雄二が会社内で密かに囁かれている噂について聞いてみる気になったの、ひとえに忍が稀に見る美人だったからである。

これを口実に、お近づきになれたら・・・
なんて下心がかなりの割合を占めながら酒井は忍に話しかけてきた。

普通の会社では聞いたことのない「特殊1課」は、
IT関連会社であるこの会社内でも一般の社員には存在はおろか名前ですらあまり知られていない。

その課に配属されるには（配属されるには一芸に秀でていなければならぬ）

という、ちょっと変わった配属にさいする条件がなされている事が原因なのか、

都市伝説のように社内に囁き続けられているうちに「一芸」が「一発芸」に変化を遂げたらしい・・・。噂とは摩訶不思議なものである。

忍はパソコンのモニターから一瞬目を離して酒井の方に顔を向けると
「屋外で火を噴いた」と、

まるで、「今日は晴れ」と、でも返事をする感じで答えると
とっさに言葉の意味を理解しかねた酒井が

「は？ 火を？ 噴く？・・・」

と聞き返してきた。

「そう。火を噴いた」

忍は表情を変えることなくはつきりと言って
またモニターに目をやりデータの入力作業を続けた。

酒井の頭は忍の発言を言葉のままの意味を認識するのを拒否し
別の意味が含まれているのではと言葉の裏に潜む何かを考えようと
したが、

どうしても思い浮かばず再度質問を続けた

「火ってどんな？」

「大道芸人が火を噴く炎」

「炎?! 大道芸人って・・・瀬良さんが、ですか？」

「私がやらないで誰がやる? 私の配属テストの事だろう?」

この短いやり取りで、酒井はうっすらと

忍は見た目と性格が一致しない人格であると感じ取ったのだが、
黙っていたれば美人であることは変わりなく

今聞いたのは悪い夢だと思い込もうとしたが、「炎」と「大道芸人」
と言った二つのワードが頭にこびりついてしまっただけ無理だった・・・。

「なんで一発芸でそんな危険な事を・・・」

「まあ、確かに危険だな。でも一発芸としてのインパクトはある。」

「インパクト大きすぎるでしょ?!」

やっぱり夢じゃない!!

酒井の心の中でそんな絶叫が響き渡ったとか渡らなかったとか・・・。

「うまく火を噴くにはどうしたらいいんですか？」

ここまで来たら、会話を続けてさりげなく話題を変えようと決意して口を開いたはずが
思いと裏腹に酒井はまた瀬良の一発芸について質問を続けてしまった。

「うまく火を噴く方法？」

一気に吐ききって、アルコールから逃げないと炎が口まで昇って来て唇と顔を火傷するから、事前にお風呂や野外で霧状に吹き出して、顔を背ける練習をする。

火元はライターではなくジッポか着火マンがいい、普通のライターですとアルコールが手にかかって火がつく。アルコールに炎が移ったらすぐに手を離さなす。以上だ。」

やはり、

モニターから目を離すこともなく事もなげに言った忍を酒井は恐ろしいものでも見るような目で見つめてしまった。

しかも最後の「以上だ」が脳内で「異常だ」と間違った漢字に変換されたが、

なぜかしっくりといく変換だったようだ。

この人絶対火遊びして火傷した事ある!!

そんな事を思いながらも質問は止まらない、
ここまで来たらもう好奇心としか言いようがない質問であった。

「では、なぜ一発芸で披露したんですか？」

「私がお人様にお見せできる範囲で一番の一発芸だったから」

って事は、人に見せれない芸もあるって事なのか？！

などと、心の中で突っ込みを入れながら酒井はそのまましばらく沈黙する事が懸命だと悟った。

その沈黙を守ったまま終業時まで作業に没頭して瀬良の存在を忘れるように努力した。

特殊1課が発足された経緯はよく判ってはいないのだが、部署の分類としては防犯部に分類される。

一説によると（会長の気まぐれ）だという説が有力であるとされているが、

実際の業務内容は、外部からの侵入経路の検討、防犯課が構築したセキュリティシステムの実用化に対する実験など、大まかに防犯の方面の実地を侵入者役として受け持っている。

上層部はこの実験データを元に後々にセキュリティ会社を立ち上げようと目論んでいるので、今のところは防犯課と特殊1課の攻防戦は社内での極秘扱いとなっている。

実地テストの他にも他部署お業務の応援や雑務などを行いながら産業スパイなどが侵入していないかどうかを調べたり、上層部の手足となって情報収集をおこなったりして働く事もしばしある。

ゆえに、特殊1課に配属されるのは優秀かつ柔軟な思考の物が多くなんでも迅速にこなす事が出来るオールラウンダーである事が重要とされる。

主要メンバーは5人。場合によっては準メンバーの社員が投入される事もある。

忍は終業時刻までまだ少し時間があつたのだが指示された業務が終了すると

応援先の課の課長へ仕上げた書類を提出してその課を出た。

特殊1課の部屋は、物置や倉庫として使われている部屋が集合している区画にある。

あまり人が利用することが少ない区画で扉に部署名も記名されていないので、

扉の窓から明かりが漏れているにもかかわらず、その部屋も倉庫だと思っっている社員は多い。

忍が何の変哲もない自分の部署の扉を開けると室内には30代ぐらの背の高い一人の男性が行儀悪く机に腰かけながらコーヒーを啜っていた。

忍と同じ特殊1課の佐木薫^{さき かおる}である。

薫の手足が長いので、椅子に座って寛がれると、通路を塞いでしまつて通れなくなつてしまうので課の全員から「机に座れ」とのお達しがあり今のような状態で寛ぐようになった。

雑誌に載っているモデルがそのまま抜け出て来たかのような容姿と身のこなしと甘いマスクで。

さぞ女性にモテるのであろうと推察される。

お疲れ様ですと、無表情で薫に声をかけて忍が部屋に入ると

爽やかな笑顔で「お疲れ」と声をかけ
さっと立ち上がりコーヒーマーカーから使い捨てのコップにコーヒ
ーを注いで忍にどうぞと言いながら手渡した。
忍は軽くお礼を述べて自分の席でコーヒを啜る。

「シノちゃんの応援部署、どんな感じ？」

柔らかい笑みを浮かべながら薫がそう聞くと忍は「何も」と短く答
える。

薫が「そう」と言うとは今度は

「薫さんの所は？」

と、忍が聞くが薫も「何も」と短く返事をした。

特殊1課では全員下の名前で呼び合う習慣がある。

この二人が特別仲が良いのではなく、

他部署の人間には名字で呼ぶことで暗に自分と同じ部署かどうかを
線付している事と

名字では名前を呼び合うことで親近感もわき、家族のような仲間意
識をもった信頼関係を自然と築けると、考えられたからである。

お互いに信頼関係を築けなければミッションをクリアするのが難し
い場面も度々ある事から、

この習慣は特殊1課の順メンバーの人間にも適応されている。

薫と忍の二人が部屋にいただけで何の変哲もない部屋がほの暗いの
雰囲気が一変させて

雑多な物が無秩序に積み上げられている狭い部屋の中を

一瞬にして中世の絵画のような美しい雰囲気に替えてしまった。

使い捨てのコップですら高価なティーセットのように見えてくるか
ら不思議である。

「お疲れ様でーす」

美しい絵画のような雰囲気を違う意味で一変させるような
疲れた表情で扉を開けたのは同じく特殊1課の久々（くく）次郎^{じろう}で
ある。

「ジロちゃんお疲れ」

薫がぐったりと椅子に座りこんだ次郎の目の前の机に優雅な仕草で
コーヒーを置いてやると

ありがとうございますと言ってコーヒーを一口啜った。

末っ子といった感じの雰囲気を持つ次郎は

課の最年少である忍の1期上の先輩である。

子犬のような容貌と人懐っこさで実年齢よりも若く見えてしまうら
しく、

スーツ姿にも関わらず居酒屋などでお酒を注文すると年齢を確認さ
れることがたびたびあるらしい。

「ジロちゃん所の課はどうだった？」

コーヒーを飲み終わってぐったりと机に突っ伏していた次郎に薫が
そう声をかけると

「もー、人使いの荒いところでしたよ!!」

僕一人で倉庫と書棚の整理させられちゃって、誰も手伝ってくれ
ないんですよ!」

「応援人員だからな、雑用させられるのはいつもの事だろう。」

「それでも、指示する人が1人ぐらいつくじゃないですか？ それ
も無しです。」

「マークされてる？」

忍が静かにそういうと、薫も優しく微笑みながら

「今回はジロちゃんの課で何かあるかもね」

やましい事がなければ応援として受け入れられるが

やましい事があれば、今回の次郎のように応援部署の核心に触れられないような

遠い雑務をさせられる事が多い。

しかし、

見た目はともかく次郎も特殊1課の人間である。

倉庫や書棚の中からもその部署の内情を知るのはお手の物である。

人懐っこい性格で他の社員とも仲良くなり有力な情報を手に入れるのは得意である。

「確証が出てきたら報告にあげます。」

次郎がそういうと、部屋の扉が開いて二人の男性が入ってきた。

一人は、薫ほどではないが背が高く、がっしりした体格でその大きな体に窮屈そう背広を着ている格闘家を思わせる風貌の男性で名をみやもと宮本陽一で役職は特殊1課の課長である。

もう一人は小柄でぼっちゃりした顔の男性で陽一とは対照的な柔和な雰囲気きたやまを醸し出している。

名は北山渉きたやまといい、課長補佐として陽一の補佐のような仕事をしている。

「お疲れさん」

陽一がそういうと、3人そろって立ち会ってお疲れ様ですと返事をした。

「薫・忍・次郎 何か報告事項はあるか？」

陽一がそういつて席に座ると渉を含めた4人は陽一の机の前に集まった

「私の方は特にありません」

最初に薫が言うと、次に忍も私もありませんと続き

「僕の方は少し引かかることがありますが、確証が出ましたら報告させていただきます。」

と、次郎が短く締めた。

「そうか、次郎の方はそのまま業務につけ、薫と忍は明日は特殊1課で待機

私と渉は単独行動とする。動きがあり次第報告とする。以上解散」

短い報告が終わると各自が自分の席に戻り帰り支度をする。

「今日、手合わせ願えませんか？」

次郎が薫にそういうと

「いいよ。シノも行くだろ？」

と、薫が言うと忍は薫と次郎の方を見て頷いた。

「陽一さんと涉さんは？」

薫がそういうと

「俺はいいぞ。涉は？」

陽一が気軽にそう答えると

「俺はやめとく、お前らとやったら、怪我する」

そういって、涉は一人お疲れくと、手をヒラヒラ振って部屋を出て行った。

「じゃあ、行きますか」

そういって、次郎をはじめとして特殊1課の面々は会社を後にした。

その2

飛び散る汗と肉体の限界へといざなう熱い熱気
ぶつかり合う気迫に周りの空気が飲み込まれるように熱くなる。

ここは会社近くにある会社の厚生施設である格闘技場で、
会社の厚生施設なのに、その存在を知らず会社の社員たちが利用する事も少ない。

主に、スポーツ選手などが会員になり利用している高級スポーツジムなのであるが、実は特殊1課が在籍している会社がスポンサーとして出資している施設である。

施設としては、50Mプールに始まり各種マシンの他、ロッククライミング用の施設や柔剣道のような格闘技場、テニスコートからゴルフの打ちっぱなしの施設まで取りそろえられた広大な敷地に作られたスポーツの複合施設なのである。

特殊1課では毎日のように業務の一環として会社帰りに体を鍛えている。

社内の要人の警護や侵入者の排除など、表舞台には登場しないような物も業務に含まれているし。

（会社内に侵入して指定されたものを取ってくる）といった社内訓練も秘密裡に行われており、その時の定石にとらわれない犯人役をおこなったりしているので

体を鍛えていろいろな方法で侵入したり、警備部員と白兵戦をおこなえるように鍛えているのである。

ミッションが成功されれば特殊1課に臨時ボーナスが支給され

防犯課がミッション阻止をすれば臨時ボーナスは防犯課に支給されるので、日頃から特殊1課と防犯課とでは水面下の腹の探り合いが行われている。

なので、臨時ボーナス獲得の為に日々鍛錬を重ね

タイミングがあうと今日のように、手合わせをして互いに技術を磨きあい

お互いの弱点を知り補い合うのである。

「くそ!!」

「まだ甘い!」

汚い言葉をその場に残して、マットの上に容赦なく投げ飛ばされたのは忍で

その忍を「甘い!」と投げ飛ばしたのが陽一である。

女性としては背が高い分類に分けられ

スレンダーな体系ながらも格闘センスのある忍といえども

鍛え抜かれた陽一の前では子供もどうぜんの扱いである。

「お前は軽いからきっちりマウントをとっても、軽々と覆されてしまうんだよ。」

長いスパッツに短パン・長袖のTシャツ姿の忍は悔しそうにマットの上で粗い息を吐き

これまたスパッツに半パン・タンクトップ姿の陽一が忍に激を飛ばしている。

忍は投げ飛ばされた後も野生の本能かのように目だけは陽一からそらさずに睨んでいる。

「そんなの出来るの、陽一さんだけだと思いますよ。」

マットの外で順番待ちをしている忍と同じくスパッツに短パンにTシャツ姿の次郎がそう言うത്
スパッツに半パン・Tシャツ姿の薫も「そうだね」とおっとりと言った。

忍よりも背が高い薫ですら、忍に完璧に決められると体勢を戻すのには時間がかかってしまう、
次郎に至っては本気を出した忍に数秒で落とされたことがあるのである。

闘志むき出しで立ち上がった忍が「もう一度！」と陽一の前に立つと
うとするが

「シノちゃんは休憩」といって薫に首根っこを？まえられて壁際に引きずって行かれる。

息も粗く汗にまみれで乱れた髪が顔に張り付いていても、忍は相変わらず美しく

逆に、いつもはビスクドールのように無表情で淡々としている分、格闘技をしている時の暑さで火照った頬が

生き生きと感じさせてより美しさを際立たせている。

陽一も薫も次郎も会社では目立たないようにと、控えめ行動しているが

ここでは会社の人間の目がないので思いっきり力を発揮できる。
鍛え抜かれた肉体と鬼気迫る覇気を纏わせた特殊1課の男性陣を
会社の女性社員が見たら『別人だ！』と、目の色を変えるのではな
いかと思えるほど男らしかった

忍もなんとも言えない色気を感じさせる程の気迫を纏わせていた。

忍が「はぁーあ！」と、スポーツドリンクを飲みながらへたり込むと薫が「無理するなよ」と、タオルを肩にかける。

「もうちょっとで、決まりそう！！って時にスルスルッウって逃げられちゃうんです！」

「俺たちには、「スルスルッウ」じゃなくて、「よいしょ」って軽く横に置きなおされたように見えたぞ」

薫が見たままの感想を伝えると

「えー！ 相手にもされてないって事？」

と、床の上に大の字に寝転がる。

忍と交替で入った次郎は早くも、陽一に早く攻め落とせれてマットの上でぐったりしている。

「あらら、もう俺の順番が回ってきちゃったよ。んじゃ、行っちゃいますか。」

のんびりとそう言って、次郎の足を持ってマットから引きずり降ろした薫がマットの上に立つと

先ほどのまでのんびりした薫の雰囲気が一瞬にして殺気立った闘志で包まれ

準備運動は済んだといわんばかりの陽一と薫が正面で向かい合った。

ここからの対戦は見ものである。

2人を相手して、少しは体力を消耗している陽一が勝つかリーチの差を生かして薫が勝つかの大勝負である。

「シノはどっちにかける？」

「薫さん」

「じゃあ、僕は陽一さんね」

マットの外では、帰りのビールをかけて忍と次郎が二人の戦いを楽しんでいるのもいつもの事である。

今のところ、陽一の方が勝率は高いのだが、ああ見えて、格闘技のセンスが抜群の薫が長い手足を利用して果敢に攻めると場合によっては陽一をも凌ぐ場合があるので油断は出来ない。

お互いに相手の隙を伺い続けたが、勝敗は一瞬でついた。

目にもとまらぬ早業で関節をキメた薫の勝利であった。

「さすがに3人抜きなんてさせませんよ。」

さらっと勝者のコメントをした薫に

「さすがに疲れがでたか」と全然悔しそうには見えない敗者のコメントが返された。

「でも、シノと僕が戦って体力を消耗して五分なんて強すぎでしょ?!」

次郎がそういうと「お前は消耗のうちに入らない」と冷たいコメントが陽一から入ってきた。

4人は格闘技場を後にして各自シャワーを浴びて着替えると駅近くの居酒屋へとなだれ込んだ。

とりあえず、ビールで乾杯してから喉の渴きを満たす。

しばらく、うだうだと雑談をしていて話題が今日、忍が聞かれた配属テストの事になった。

「いつから配属テストなんて噂が広まっちゃったんでしょうね? しかも、

『一芸』が『一発芸』になっちゃってるし」

次郎が笑いながらさういうと

「それで、忍が『火を噴いた』なんてからかったから、明日から噂

がまた誇大妄想して広がっちゃうんだろうな」

陽一が焼き鳥をほおばりながらそう言う

「嘘はついてませんよ。」

忍がシレッと言うと

「あれは見事な炎だったよね」

と、薫が思い出したかのように笑う。

特殊1課に配属にあたりテストなど存在しない。

事前に内部調査の結果、有望な人材と認められれば特殊1課からスカウトに訪れるのである。

忍が作り出した「伝説」によって『一芸』から『一発芸』へと噂が変わってしまったのだと、その場の全員が思った。

それは、忍を特殊1課準メンバーとして採用された歓迎会を兼ねた野外研修での夜に起こった。

始終カリキュラムを黙々とこなし、周りのメンバーとまだうまく周りに溶け込めていない忍を気遣った陽一が

悪乗りしてアルコール度かなり高いお酒を持参し 忍に『プレゼントだ飲め』と渡したところ、忍がおもむろに開封し着火マンを手にとると、四方2mに何もない場所に移動して

大道芸人としても食べていけないのではないだろうか？

と、思えるほど見事な炎を噴いて、メンバー全員の度肝を抜いたのである。

その瞬間、その場にいた全員の男性から『この女マジ怖え』と、みんなの胸に小さな恐怖を刻みつける結果となったのだが、

無茶・無理・無謀を職業としている特殊1課のメンバーに気に入られて準メンバーから正式メンバーへと即採用されて迎え入れられたのであった。

「洒落でアルコール度の高いお酒を渡して、困っている姿をメンバーが助けて交流を図る計画のつもりが、まさか火を噴くなんて考えでもなかったからな・・・」

しみじみと陽一がそういうと

次郎が追隨するように

「しかも、やり慣れてたよね？」

と言うと忍がシレッと昔から火遊びは好きでしたからと流す・・・

ほんと、女にしておくのはもったいないここぞという時に肝の据わった人材である。

正直、忍が火を噴いたのを見た陽一と渉は「いい人材を見つけた！」と、思ったそうである。

一般人がやりそうに無い事を平気で遣って退けてみせるそのチャレンジ精神は

定石や常識にとられない自由な行動をおこなえると云う事である、予想の斜め上を読む事が出来る人材を探していたのである。

忍の様子から、指示に従わずに勝手に暴走するタイプで無い事は察せられたので

これならば自分の下で十分に力を発揮させてあげられると

勝手な上から目線の二人が、こっそりほくそ笑んだのはここだけの話である。

「薫さんとジロちゃんはどやって入ったんですか？」

忍がビールジョッキを片手におつまみに手を伸ばしながらそういうと

「薫は趣味で続けていた格闘技のセンスをかわれたのと

ジロは学生時代に体操選手として活躍してたからな。

二人とも身体能力をかわれてこの課に来たんだよ」

陽一の話聞きながら枝豆を口に運んでいた忍は

そうなんですかぁーと言いなながら口いっぱい居れた枝豆を租借してビールで流し込んだ。

「シノ・・・お前、お酒飲むときおっさんだよな・・・」

次郎がボソッとつぶやくようにそういうと

陽一も

「こいつは、本当にスペックと中身が一致しない奴だよな・・・」
と同意した。

忍はそんな言葉もどこ吹く風と言った感じで
マイペースでおつまみとビールを口にし続け、

薫はそんな様子を微笑みを浮かべながら優雅にビールを飲んでいる。

何とも形容しがたい、ちぐはぐなメンバーが集まる特殊1課の
よくある居酒屋風景であった。

久しぶりの攻防戦依頼

最近、通常業務の応援という形の仕事が多かったが久しぶりに防衛課との攻防戦の依頼が上層部より降りてきた。

防衛課が張りめぐらせているセキュリティーを掻い潜って

こちらの隙について襲いかかってくる防衛課と戦闘を繰り広げながら防衛課が隠した「防衛フラッグ」を制限時間内にGETする事が「攻防戦」の全容である。

攻防戦に関して言えば

『防衛課が作りだした

セキュリティーシステムを掻い潜って

ありとあらゆる手段を用いて上層部が設定した舞台に潜入しフラッグを取ってくる事。』

特殊1課の業務内容はただそれだけである。

攻防戦で使用された侵入経路や回避方法・システムの欠点・感想等等などを

攻防戦に参加した特殊1課のメンバーが報告書として提出し

その書類を基にシステムデータを改良し

「予想外の行動」から「想定範囲内の行動」になるように研究を重ねて対策を講じて

より良い製品を顧客に提供するのである。

最近では、セキュリティーシステムのみならず、警備としての人員を派遣するシステムもサービスの一部として開始されている為、防衛課の実戦経験の質を上げるべく

防衛課が侵入してきた特殊1課を取り押さえて制圧するという形態

の「攻防戦」に変化をしてきた。

いわゆるセキュリティシステムとマンパワーのタッグを組んだ活躍の見込みも考慮していく方針のようで

ノリノリな上層部の計らいで、攻防戦の舞台も方法も毎回違う。

今回の舞台は

- ・ 事前に何も知らされていない社員達であふれる昼間の自社ビル。
- ・ 制限時間3時間
- ・ 防衛課が隠した「防衛フラッグ」を発見する事。

その情報を提供されたのが 攻防戦開始2日前の事であった。

いつもは1週間程前に連絡があり

その間に、侵入する建物や周りの状況などを

分析し、防衛課が隠しそうな「防衛フラッグ」の場所を推察したりするのだが

今回はなぜか2日前

おそらく、舞台が自分たちに馴染みのある自社ビルと云う事あり

防衛課と特殊1課両方に

事前準備をする時間を与えないで対等に攻防戦を繰り広げろという上層部の考えなのだろうと思う。

上層部の攻防戦依頼の情報が入ってすぐ

特殊1課の正式メンバー達は緊急会議に入った。

「自社ビルとは思いつた事をしますね。」

「何か問題が起きたとしても

自分たちの会社の事だから何とかなるとでも思ったんですかね？」

いつもは防衛課と特殊1課以外は存在しない場所で攻防戦が行われるのだが

今回は初めて 部外者が存在する場所での攻防戦と云う事もあって少々やりにくいと感じながらの会議となった。

「第一の問題は、部外者と防衛課の見極めが出来ないって事だな。まあ、その点に関してはお互い様だけど」

防衛課と特殊1課は交流があまりない。

というか、逆に交流を持たないようにしている。

敵同士になる事が多いので、

お互いの機密事項を知られないようにする事もあるが
敵対する者どうしなので、

気持ちの上でどうしても相容れない部分が出てきたりする事も関係している。

怪しい行動を取っているから攻撃したら

実は、何も知らない一般社員だった・・・では、洒落にならないのである。

しかも、

忍と薫に関しては目立つ容姿の関係で特殊1課の所属であるとバレてしまっているの

この二人に関しては防衛課に見つかれば即攻撃される事は確かである。

そんなわけで、今回の課題は

いかに一般社員と防衛課メンバーを見極めていかに迅速にフラッグをGETするかである。

そして、今回の作戦は

次郎が何気なく発した言葉が採用されて　そのままその作戦について
あれやこれやとを詰めて行く事になるのであった・・・。

攻防戦開始 1

「前の人と押しあわず 迅速かつ安全に避難をお願いします。
エレベーターは使用せず、なるべく階段を御利用下さい。」

避難先は各課の課長及び部長へ通達しております。

単独での非難は避け 出来るだけグループでの避難をお願いします。
す。」

先ほどから同じ事言葉を何度も繰り返しながら
避難誘導をする特殊1課のメンバー

ある程度の避難指示を出した後、上の階から順番に避難遅れの人間
が居ないかを確認しながら下に降りて行く。

事前にしっかりと通達していたおかげか

目立った混乱もなく 一般社員はすべて屋外へ出たようである。

特殊1課の正式メンバーと準メンバーを総動員して
防衛部以外のすべての部署に ある資料を作成して配った。
その資料にはデカデカと『緊急避難訓練』という文字が躍っていた。

2日前の作戦会議中に一番問題になったのが
一般社員と防衛部員の見分け方であった。

陽一の、

「スーツを着た筋肉たるまはすべて防衛課だ！」
と、なんとも大雑把な発言に

「じゃあ、お前も防衛課のメンバーなんだな？」

と云う渉のツツコミが入り

「一般社員を隠れ蓑に襲われたらどうするんだ!!」

という、事で議論をしていたところ

次郎が何やら考えながら

「一般社員だけ屋外退避させれたら判りやすいんですけどね・・・
避難訓練でもします?」

と、言った事が発端で『緊急避難訓練』と称して屋外退避させる事で議論はまとまった。

そこからの特殊1課の動きは早かった。

社長をはじめとする上層部に無理やり許可をもぎ取ってきた陽一の指示で

準メンバーまで招集しての人海戦術で資料を作成し配布し

各部署の管理職に「スムーズな対応をした部署には社長から何かあるかもしれない・・・」と、競争心を煽るような言葉を匂わせながら緊急避難訓練のレクチャーを行い

会議や商談などの予定をすべて

会議室・応接室等の場所の変更手続きや連絡などを特殊1課自らが責任を持って行い

完全に攻防戦の舞台となる自社ビルから無事に一般社員を排除したのである。

「一般社員の避難、完了。 いまからミッションに入る。」

特殊1課全員が所持している無線機に向かって支持を飛ばす陽一の後ろで

準備運動を始める忍・薫・次郎の3人

次郎は屋外から

陽一・薫・忍は屋内から

防衛フラッグを探して動くのである。

渉は防衛部からの妨害が入らないように警備室を占領して4人のバックアップに回る。

自社ビルを舞台にしている分

特殊1課も防衛課も条件は五分五分である。

潜んでいそうな場所や 抑えられては動きにくい場所などはお互いに知り尽くしている訳である。

なので、いかに頭を柔軟にして相手の裏をかけるかが勝利のカギを握る事に繋がる。

と、云う訳で

各自が持ち場に別れて待機する。

「5分後作戦を開始する。各自持ち場にて待機。

カウントは各自で行い 作戦に臨む事。以上」

陽一は各自が持ち場に移動する事を支持する。

「「「了解」」」」

そうして、特殊1課の『攻撃』が始まる。

攻防戦開始 2

「シノちゃん、行くよ。」

薫はそう言って忍と連れだって歩きだした。

そこは、素人的に視角になりそうな場所・・・

だか、

防衛課のメンバーからは丸見えであろうと思われる場所・・・

おそらく、

角度的に 防犯カメラからも良く見えるであろう場所へ・・・

予定通り、陽一の号令からきっかり5分後に二人は動きだした。

恥じらうかのように、はにかんだ笑顔を浮かべた女性が男性の手を引いて

物陰になりそうな所に入った

男性は愛おしそうな表情を浮かべながら女性の腰に手をまわして

自分の方に引き寄せるように優しく包み込む。

女性は男性の胸に顔をうずめるように頬を寄せて男性の背中へと手を回す。

そして、二人でクスクスと小さな声で笑いあいながら

しっかりと体を寄せ合うように抱き合う

これまた、絵に描いたような美しいカップルで

やっぱり、

良い男の所には良い女が寄って来るんだろうなあと、

その場に居た防衛課の全員が思った。

恋人同士が

人が少なくなった社内で見せた恋人同士のちょっとした逢瀬・・・
自分たち以外 人の気配を感じない事を良い事に

少しずつ不埒な手の動きがエスカレートしていこうとする彼氏の手を、

『ダメよ、ここは会社なんだら』と、でも言っているかのようにやんわりと彼氏の手を止める女性

男性が女性の耳元で何かを囁くと 女性は嬉しそうに笑ってクスクス笑い

男性の胸に身を寄せる。

男性がふいに女性の顎に手を当てて顔を上げさせて

自分の顔をゆっくりと近付けて行く。

至近距離でしばらく熱い視線を交わしている。

大事な攻防戦の最中。

そして、

通常であつたら業務時間内になんと不埒な行動をとる奴らだろうという考えが頭をかすめるが

余りにも絵になる二人のささやかな情事に

目が釘付けになってしまっている防衛課のメンバー……。

そんな光景を目にして

思わず先走った想像からゴクリと喉を鳴らした防衛課の男性は

隣に居た同僚の存在すらも忘れる勢いで魅入っている

自分にも彼女が出来たら、あのようにどっぷりと二人の世界に浸りたい物だ……

と考え事をしていて、自分のすぐ後ろの人物の気配に気づくのが遅れた……

鈍い鈍痛の後、

自分の身に何が起ったのかさっぱり分からない……。

カップルの逢瀬を見ていたはずの視界が

いつの間にか目の前に床が至近距離であつた……

慌てて体を起こそうとするが、まったく体が言う事を聞いてくれない

い。
はて？

この痛みと この体勢はいい？と、思っていると
視界の端に大柄の男性がよぎり、自分の口に猿ぐつわをはめさせら
れる。

あっという間に手足を縛られ芋虫状態にさせられてしまった。
その時点で、

今自分が 「攻防戦」の『防衛』を行っていた事を思い出し必死に
抵抗を試みようと努力するが
ここまでされては無駄な抵抗である。

「んゝうんゝ！！！！んゝ！！！！」

なんとか、近くの仲間に助けてもらおうと 身を振ってその場から
逃れようとした時

視界の端に自分と同じように縛られて

床にはいつくばっている同僚の姿が映った・・・。

その先にも、縛られたであろうと思われる男性の足がチラツと見え
ている・・・。

お前達もか！！

なんとも敗北の色の濃い今の状況に為すすべもなく
大人しく降参するしか方法が思い浮かばなかった・・・。

そして、自分を縛り上げた男性に

「はい、お疲れさん」と、胸のあたりに紙をペタリと貼られる。

そこには赤い字で大きく『×』と云うマークが書かれてある・・・。
つまり、「戦力外」攻防戦から落脱した事を意味する。

この時点で、

攻防戦が終了するまでこの場所で味方に回収される事無く放置され
る事が決まった・・・。

特殊1課のメンバーの中でメカに強い渉の存在が知れ渡っている為に外部から監視カメラの映像を通じて味方の潜伏先を知られないようにしており

カップル（忍と薫）の逢瀬の隙について制圧された事に気付けなかった事が

事態の把握を遅らせる原因になった。

しかも、

その監視カメラの映像も途中から渉によって録画された別の映像とすり替えられていたので判るはずもない。

きっと、モニターを監視していた防衛課のメンバーは

攻防戦が終了するまで忍と薫の逢瀬を食い入るように見ている事であらう・・・。

陽一が電光石火の早業でその場にいた防衛課のメンバーをつぎつぎと縛り上ながら武装解除をおこなう。

セキュリティシステムも渉との連係プレイで次々と解除していった。

今回

陽一が忍と陽一に提案した

その作戦名は『空気を読まないバカッポー作戦』（↑何と言うネーミングセンス・・・）は

男所帯の防衛課の男どもに見目よい二人がイチャイチャしている所を見せつけて

その隙に陽一が制圧するというなんとも大雑把な作戦であった。

その作戦内容を聞かされた二人の反応は

薫は『役得だね』と快諾し

忍は相変わらずの無表情で了承した。

次郎にいたっては

「なんで僕じゃダメなんですか？」

と、質問して全員に黙殺された。

「制圧完了　忍・薫　速やかに次の作戦現場に移動！　次郎は合図を待て。」

無線から聞こえた陽一の指示を聞いて

忍と薫は

さっきまでのイチヤイチャぶりは何だったのか？！

と思わせるほどすっぱりと体を離し

無表情で指示に通りに次の作戦現場へと移動を開始した。

時を少し戻して・・・

防衛課のメンバーが

忍と薫の「バカッポー作戦」を開始した数分後

渉の「映像ジャック完了」という言葉を合図が入り

動きやすくて体にピッタリとした服装をした次郎は

屋外の非常階段の近くで建物の壁を伝って登り屋上に登り始めた。

次郎の趣味はロッククライミングである。

しかも、ザイール1本あれば

足がかりの無い5階建てビルぐらいなら余裕でよじ登る。

今回は昼間で

目立ち過ぎると云う事で非常階段と窓枠を使って屋上へと上がり

人目の突きにくい階まで上がると前もって準備をしていたザイール

を伝って

壁をよじ登って早くも屋上へとたどりついた。

ビルの1階から侵入する3人とは別に

屋上からビル内に侵入し、最上階から防衛フラッグを搜索する挟み

撃ち作戦の為

陽一の合図があるまで屋上の物陰に隠れて待機する。

攻防戦開始 2（後書き）

「イチャついて居た時に囁き合っていた忍と薫の会話」

薫が忍の耳元に顔を寄せる・・・

「シノちゃん、

今日は防衛課の奴らをどの技で落とす？」

「ウフフ あまり時間をかけたくないの、一瞬で寝て貰おうかと」
「楽しむより時間を優先させるなんて素敵だね」

忍は薫の首に手をまわしてうつとりとほほ笑む

「薫さんは？」

「そうだね・・・

最近、大立ち回りしてないから ゆっくり落としていきたいかな？」

忍の腰に手をまわしてそう云うと

「それにしても、陽一さんの捕縛って本当に早いすよね」

「ほんと、今度教えて貰ったら？」

「実験体はジロちゃんですよね？」

「もちろんだよ」

忍は薫の胸に頬をうずめるようにしてピッタリとくっつく

「たまには、薫さんも実験体になって下さいよ」

「遠慮するよ。俺、縄抜け得意だけど跡残るの嫌だし」

「えーえ、だってジロちゃん

縄抜け苦手だから 私の捕縛の練習にならないですよ」

薫は忍の顎に手をやって顔を少し上げさせてゆくり自分の顔を近づ

けて

至近距離で止める

「じゃあ、陽一さんを実験体にしたら？」

「ダメですよ。あの人 縛るの好きだけど縛られるの嫌いだから
返り討にあいそう」

「そういうえば、縄抜けの練習の時に 縄を引きちぎってたな」

「縄をちぎるって人類超えてますよねえ」

この二人、イチャつきながら

とくっても、不穏な会話してました（汗）

攻防戦終了

次郎は、登って来た時に使ったザイルを回収して陽一からの合図があるまでただじっと物陰に身を潜めて待機していた。

『薫・次郎・忍 第2作戦にかかれ!』

と、の無線に「了解」と返事をして次郎は静かに行動を開始した。

身に付けた道具や荷物は走っても物音ひとつしないように体にピッタリとフィットさせて、なおかつガムテープでしっかりと固定している。

それは、社内張り巡らされているであろうと思われる警報機などのセキュリティシステムにかからないように最新の注意を払っているからでもある。

窓から社内に侵入すると

ゆっくりゆっくりと足音を忍ばせ、影や気配などを悟られないように慎重に慎重を重ねて進んでいく。

天井に設置された監視カメラに関しては渉が画像ジャックしているので気にしなくてもいいので、その点に関しては今回、動きやすいと云える。

防犯課の人間が潜んでいないか、防犯システムが仕掛けられていないかを手鏡を利用して確認して進んでいく。

その足取りは野生の獣が獲物に狙いを定めてゆっくりと距離を詰めているような迫力さえ感じられる。

いつもの人懐っこい仔犬のような雰囲気は一切感じられなかった。

全身の神経を集中させて 扉の一つ一つを開けて確認し

防衛課を警戒しつつ防犯フラッグを探していく。

その間に出会った防衛課のメンバーを声一つ上げる事も許さずに捕縛していく腕は

体技では忍に負けているとしても
やはり、次郎も特殊1課の正式メンバーなのだと認めざるを得ない
事実であった。

最上階のすべての扉と云う扉 隙間と云う隙間をくまなく確認し
防犯フラグがない事を陽一に伝える

『次郎です 最上階 フラッグありませんでした。 一階おります。
』

『了解』

直ぐに陽一からの返答があり 次郎はすばやく階段降りる。

この階って、防衛課の部屋がある階なんだよなあ
防衛課の事だから

この階が一番怪しいから念入りにするか・・・

そんな事を思いながら慎重に進んでいく。

最上階よりも防衛課の人数が増えている事も考慮するとやっぱり怪
しいと確信する。

一人ずつひっそりと捕縛し 物陰に防衛課のメンバーを隠しながら
進んでいく。

今回の人数が予想外に多いので 捕縛するのに本人のベルトやハン
カチを使うようにし始めた。

いつも以上に人数がいるな・・・

今回の攻防戦、自社ビルだからって気合い入ってるのかな？

そんな事を思いつつ器用に捕縛していく。

周りに防衛課のメンバーが居ない事を確認してから陽一に呼びか
けてみた。

「次郎です。南側から北に向かって進行中なのですが、防衛課の人

数が半端ないです。」

『フラッグはその階にありそうだな・・・忍をそっちに行かす。次郎はそのまま探せ』

「『了解』」

この無線は特殊1課全員と会話が出来るように繋がっている。

今までの会話のすべては陽一の手元の無線スイッチを継ぎっぱなしにしていれば

全員の耳に入る仕組みになっている。

なので、今の陽一の言葉を聞いた忍はもう間もなくこの階にやってくる。

次郎はそれまでの間に、自分の周りの搜索と制圧を徹底的に行っていた。

『忍です。到着しました。北側から搜索入ります。』

『次郎です。南側エレベーターホールの近くに居ます。右回りに回って行きます。』

『了解』

そう言った次郎はエレベーターホールを横切ってトイレの前に立った。

男子トイレに入り用具入れを含めた全ての扉を開けて確認し窓や換気扇なども丁寧に見て行く

そして、女子トイレ 気持ち的には抵抗があるが、今は攻防戦の最中なので女性社員と鉢合う事もないであうろと侵入しようとする。

すると、入口に入る手前で、敏感になっている次郎の耳に小さな小さな人の呼吸音を捉えた。

え?! 人がいる!!

あいつら
防衛課だよな?

でも、もしかして避難遅れの女性社員だったら・・・

そう思うと、動けなくなってしまった次郎・・・

数秒考えてまた無線で陽一に連絡を入れる。

「次郎です。南側エレベーターホール付近の女性トイレに人の気配がします。念のためにシノをお願いします。」

『忍を向かわせる。忍 次郎と合流しろ』

『了解』

トイレの物陰から辺りをうかがっていた次郎のもとに忍が現れた。次郎は女性トイレを指さして忍を見ると、忍は黙って頷いて女性トイレに侵入した。

忍は、器用に壁をよじ登って トイレの仕切りの上から中を覗き込んでいます。

そして、次郎の方を向いてニヤリと笑うと、そのまま覗き込んだトイレの個室に飛び降りる。

おそらく、防衛課のメンバーが中に立てこもっていたのであろう。

トイレの中の空気が無音で一瞬揺れ、しばらくすると

忍が飛び込んだ個室の扉が空き 忍がそっと出てきた。

そして、すべての個室の中を確認し防衛課メンバーがいれば捕縛していく。

相手は抵抗する暇も与えて貰えずに忍によって捕縛されていく。

今日は時間をかけずに落としていきたいと言っていた事は実行されている様子である。

そして、最後の扉に入って中を確認して出てきた忍の手には探し求めていた防衛フラッグが握られていた。

これを安全なところまで運んで終了宣言をすれば、攻防戦終了となる。

「お！やったな。」

「さすがジロちゃんね。はい。これはジロちゃんの手柄ね。」

そう言って乏しい表情ながらも嬉しそうに忍は次郎にフラッグを握らせた。

最終的に見つけたのは忍なのに、”もしも”を危惧して忍を行かせ

た事は判っているので

忍はフラッグを次郎に渡して 手柄を譲ったのである。

次郎はフラッグと忍の心遣いを満面の笑みで受け取った。

「防衛フラッグ回収しました。予定通り、最上階に向かいます。」

次郎が無線に向かってそう言う

『了解』

と返ってきた。

忍と次郎はそのままフラッグを手にして屋上へと向かって走って行った。

屋上でしばらく忍と次郎が待機していると陽一と薫の二人がやってきた。

最後の最後にフラッグを奪われては元も子もないので慎重にあたりをうかがって近づいてきた。

次郎が陽一にフラッグを手渡すと

「次郎、良くやった。では、ただ今から撤退する。準備して順番にかかれ」

「了解」

陽一の命令を聞いて次郎は先ほどとは違う長いザイルを屋上から地上に向けて落とした。

そして、迷うことなくそのザイルを使って屋上から地上に向かって降りて行った。

そのあと、忍・薫と続き最後に陽一が地上に降りてきた。

4人が無事に地上に降り立つと

陽一は一人でビル内に入り

社内全体に響き渡っているのではないかと思われるほどの大きな声で終了宣言を行った。

そして、ここに特殊1課勝利の攻防戦が終了した。

作戦開始より2時間30分であった。

防衛課との講習会（前書き）

直接的な暴力シーンはありませんが
力によって押さえつける・・・または、それを連想させるような表
現があります。

この回を飛ばしても本編には全く影響はありませんので
念のために苦手な方は読まずに次へと進んで頂けますようお願いし
ます。

防衛課との講習会

めんどくさいな・・・

傍らに立つ薫にしか聞こえないような小さな声で忍がボソツと呟いた。

常は無表情の忍からはその場に居る人間にその不機嫌さは判らないであろうが

今の忍は『超』がつくほど不機嫌であった。

忍の傍らでは薫が忍の不機嫌さに気がついて苦笑いを浮かべている。そんな二人の正面には防衛課のメンバーがずらりと並ぶ・・・全員が柔道着を着て・・・。

事の始まりは

前回行われた攻防戦終了後に作成された報告書にあった。

毎回、攻防戦の後には特殊1課も防衛課も報告書を提出する事を義務づけられている。

作戦内容とそれに伴う考察 実地時に感じた良い点・悪い点などを記入して提出するのである。

そして、

その報告書に特殊1課のメンバー全員が

『どんなに人数が居ても、一瞬で制圧されては防衛課の意味がない』と、痛烈に酷評したのである。

その報告書に目を通した上層部はこのままでは新しい事業に差しさわりが有ると考え

防衛課に対して特別講習を行うように通達したのである。

そして、

それならば特別講師に特別1課を招いて欲しいと防衛課の課長が申し出た。

防衛課課長の胸中に、

この機会にいつも煮え湯を飲まされている特殊1課のメンバーに対して

意趣返しをしてやろうという思いがあった事は正直否めなかった。

社外からの講師を招こうかと考えていた上層部は

特別1課が講師を務めるのであれば話は早いと

直々に「今回の講習会の講師をせよ」と特殊1課に依頼して来たのである。

“但し、講師は宮本陽一以外のメンバーで”、と・・・。

さすがに数多くの社員を病院送りにされてはたまらないと思った上層部の思いが

透けて見えるような依頼内容であった。

そうなると戦闘能力の面で戦力外の渉を除く3人に絞られる。

その結果、薫・次郎・忍の3人でくじ引きをして

薫と忍の二人が講師として赴く事に決まったのである。

「特殊1課の佐木さきですこちらは瀬良せら。今日は宜しくお願いします。」

薫の挨拶に合わせて忍は軽く頭を下げると、警戒心むき出しの防衛課のメンバー達も頭を下げる。

いつまでたっても不機嫌そうな忍を見て、

薫は忍の耳元で何やらごによごによと囁いた。

その瞬間、忍が妖艶な笑みを浮かべた。

その表情を見た防衛課のメンバー全員が息を吞んで固まった。

ただでさえ美しい忍の顔が妖艶にほほ笑んだそれはもう『顔面凶器』その時点で脱落者が数名出た事を忍は知らない・・・。

「では、瀬良が実演します。私は説明に回らせて頂きますので何方かお手伝い願えませんか？」

その瞬間、防衛課のほぼ全員が挙手して自分を指名してくれと無言のアピールをした。

「では、そちらの方お願いできますか？」

薫が一人の男性を指名した瞬間

その男性は周りに居た同僚から嫉妬心むき出しの視線が突き刺さった。

もし、この視線が人の目で見える事が出来たならば、彼はハリネズミまたはヤマアラシの様な姿になっていた事であろう。

「よ、よろしくお願いします」

男が絞り出すようにそう言うと、忍は微かにほほ笑んで小さな声で「宜しく」と云った。

「実演に入らせて頂きますので、少し離れた場所からご覧いただけますでしょうか」

そう言うと、防衛課のメンバーはゾロゾロと忍達と少し距離を取った場所へと移動した。

実演組の忍は道場の中央に立ち 少し距離を取って向かい合った。

「では、始めます・・・始め！！」

薫の鋭い開始の合図とともにさっきまで普通に立っていただけの忍が一瞬にして並々ならぬ殺気を漲みなぎらせて相手の間合いに詰めよった。

男はそんな忍の豹変に驚き、対応が遅れ気がついた時にはすべてが終わっていた。

あ！と、声を上げる間も与えられず

来ていた道着の上を捲りあげられ、引き倒される瞬間に体を回転されて両腕を頭の上に上着を使ってねじって動けないように止められ帯を瞬時に解かれ、その帯で両足を縛りあげられてしまった。

「はい、このようにしてわれわれは相手を捕縛しております。」

一瞬にして訪れた沈黙を破るかのように言った薫の横に何事もなかったかのように忍が立った。

その瞬間、防衛課のメンバー全員に戦慄が走った。

「アドバースといたしましては、我々は捕縛する人間のベルト・靴紐などを利用して拘束しています。ですので、攻防戦に挑む時の服装には気をつけるべきだと申し上げておきます。」

もつと言うならば、特殊1課はその場にあるすべての物を利用して捕縛を行う訓練を行っている。

なので、ベルトや靴紐に限らず、着ている衣服を剥いで捕縛されるので

いろんな意味で気の付けようがない事は言わずにおいた。

「では、もう一度『捕縛』の訓練をしますので、どなたかご協力願えませんか？」

薫がそう言った瞬間 防衛課のメンバーはあれ？と思った。

そこに転がっている男を開放してもう一度したらいいじゃないかと・・・

そんな事を思っているうちに

「では、こちらから指名しましょう。あなたお願いします。」

そう言って、薫は無理やり最前列に居た男を立ちあがらせて忍の前に連れてきた。

「では、始めます・・・始め！」

そうしてまた始まった数秒後には捕縛された防衛課のメンバーが畳の上を転がる事となった・・・

これを何度か繰り返した後、

「では、今度は私と瀬良の二人でこの場に居る全員を『捕縛』します。

せいぜい頑張って抵抗してくださいね。では、始めます・・・始め！」

そして数分後、

防衛課のメンバー全員がさまざまな方法で捕縛されて畳の上を転がる事となった・・・

「はい、これで皆さん捕縛されました。今度は縄抜けの練習です。これから5分以内に『捕縛』から抜け出てください。では、始め

！」

これは訓練だ！と言ってはいるが
完全に自分たちとの力の差をまざまざと見せつけているより他なら
ない

その場の全員が思ったが、
取り敢えずこの捕縛から逃れれば、少しは特殊^{あいつ}1課^らの鼻をあかせると
努力を試みるが、誰一人として縄抜け出来た物はいなかった・・・。
そして、屈辱に耐えながら二人によって次々と捕縛を解いて貰った
防衛課であった。

誰だ、こんな悪魔を講師として招いた奴は！！

講師と言いながら講習会といいながら「学ぶ」事よりも一方的にい
たぶるられているだけじゃないか！と心の中で上層部に毒づいた防
衛課のメンバーは少なくはなかったはずである。

「では、次に組手に入らせて頂きます。」・・・

このあと、薫と忍の二人によって防衛課への『講習メニュー』は続
いて行った・・・。

こうして、後に「地獄の講習会」と呼ばれる伝説の講習会は無事に
(?) 終了した。

参加した防衛課のメンバー全員が翌日足腰が立たず、業務に支障が
出た事から

二度と特殊1課のメンバーに教えを請う事をしないと誓った防衛課
なのであった。

「陽一さんって結構きついですよ〜」

次の日、特殊1課のメンバーが顔を合わせるなりそんな会話になっ
た。

「何がだ？」

陽一は薫が自分に対して何を言おうとしているのか判っているくせにシレっとした顔をしてうそぶく

「先制パンチとして忍に『捕縛』させて 度肝を抜いてから全員を捕縛状態から縄抜けなんて、俺たちでも『捕縛』体勢からの縄抜けなんて難しいのに

さも当たり前のような顔してやれだなんて。

しかも、その後で組手をして完全に戦意を喪失させるやり方があくど過ぎますよ。」

言葉の意味以上に相手を全く責めた様子のない言い方をする薫そう。昨日の講習内容のすべては陽一が考えたのである。

最初、防衛課の講習会と聞いて自分が講師を務める物だと思って通達を読み続け

最後の1行に会った「但し、宮本陽一以外」の文字を見た瞬間今回の計画を思いついたのである。

次郎もしくは忍が力を誇示すればするほど防衛課の戦意が落ちる事は目に見えていた。

それを上手く利用して相手に特殊1課に刃向かう事の恐ろしさを教え込ませたのである。

ある意味、上層部の不要な配慮のせいで防衛課に入らない恐怖心を植えつけられる結果になったのである。

「おかげで、シノちゃんの『捕縛』の練習になってこちらとしてもありがたい限りなのですが」

そう言って笑った薫も結構 腹黒い物があつた・・・。

そんな薫の横で忍も無表情ながらもどこか満足げな表情をして立っている。

薫が腹黒なら忍は鬼畜だと思った渉であつた・・・。

防衛課との講習会（後書き）

薫が忍に囁いた一言とは・・・

「陽一さんが、防衛課^{こいっち}で『捕縛』の練習しておいでってさ」

である。

薫は特殊1課内で忍をコントロールする事が一番上手な人物だと言えます。

講習会後の小話

「さっきさロビーで、シノを見た防衛課と思しき筋肉ダルマが『メドゥーサだ!!』って言って物陰に隠れてたけど、お前なにしたの？」

防衛課の講習会の講師として招かれて数日後

昼食を食べて特殊1課に戻ってきた次郎が忍にそう聞いた。

薫に入れてもらったコーヒーを優雅に口に使っていた忍は怪訝そうな顔をして次郎を見た

「メドゥーサ？何の事？」

そう口を開いた時に、次郎の為に入れたコーヒーを持って現れた薫が次郎の前にカップを置いた。

「それはね、ジロちゃん。

この間の講習会の時に防衛課のメンバーに向かってシノちゃんが『笑った』からだと思うよ。」

「あゝあ、だからメドゥーサ・・・うまいな防衛課」あいつら

薫が言ったメドゥーサの説明に納得した次郎は薫にお礼を言って熱いコーヒーに口をつけた。

常に無表情な忍。

特殊1課のメンバーは、トレーニング中だけ生き生きとした表情を垣間見せるのを知っていて抗体が出来ているが、初めて見る者にはあまりにも美しすぎる忍の『笑顔』は本当に『目の毒』であり『凶器』であった。

それゆえの『メドゥーサ』なのだと一瞬で理解した次郎であった。しかし忍は、なぜ自分がギリシャ神話に登場する怪物にたとえられているのかが理解できない。

鏡を見ながら自分に向かってほほ笑む事など未だかつてした事がないので、

自分の笑顔がどれだけの破壊力があるのか判っていないのである。

「なぜメドゥーサ？」

と、釈然としない忍は素直に二人にそう聞いた。

「なぜって、お前の笑顔は破壊力あるからだろう。」

「シノちゃんの笑顔は本当に魅力的だからね。」

そう言われて、自分の目から人を石にさせるような何かが発せられていたのだろうか、コーヒーが入ったカップを見ながら考える。

自分が無表情以外の表情を特殊1課のメンバーならば何度も見ているはずなのに、誰も何も言わなかった。

それなのに何故、防衛課のメンバーには講習会で会った短時間で『メドゥーサ』と怪物の名前をふたつ名として名づけられたのが納得いかないのである。

人の容姿に全く興味のない陽一・渉・次郎の三人と

美しい者など見慣れている薫は、忍の笑顔を『笑ったら可愛いじゃん』程度にしか思わなかった・・・と云うのが真相なのだが、

今まで部署内でそんな話をした事がなかったので

忍が知らないのは当たり前なのである。

忍にいくら説明しても判って貰えないだろうと思った二人はアイコンタクトで話題を変える

「そういえば、シノって休みの時なにしてるの？」

半分ほどコーヒーを飲んだ次郎が何気ない調子でそんな事を聞いた。

「休日は、お稽古したりやりかけの作業をしたりして過ごしてる。」

聞かれた事に深くもなく浅くもない淡々とした答えを口にする忍。

「お稽古ってどんなお稽古してるの？」

薫がいつもの優しい笑顔を忍に向けながら話題を少し掘り下げる為にそう言う

「日舞や茶華道・能楽のお笛や仕舞など」

と、淡々と返事が返ってきた。

「へえー！日本文化に造詣があるんだね。やりかけの作業ってのは？」

「今は、今年着る浴衣を縫っている。」

「え?! 浴衣縫えるの?」

「縫える」

「お料理とかは?」

「料理は簡単な惣菜ならば作れる。」

「花嫁修業もばっちりだね。今すぐでも嫁げるんじゃない?」

「薫さん、スキルはともかく性格に問題があるからそれは難しいですよ。」

「そう? シノちゃんは素直でいい子だよ。」

「薫さん・・・ただ器デカいんですか!!」

シノの性格を知っててそんな事を云えるの陽一さんと薫さんぐらいですよ!」

「そうかな? ジロちゃん無理?」

「絶対無理です。俺、仕事以外で攻め落とされるのはごめんです。」

「うーん、軽く否定できないのは否めないんだけど意外とシノちゃん情熱的だよ?」

「それは、トレーニング見てて良く判ります。」

「『強くなりたい!』ってのがビバシ伝わってくるもんね。」

「あんなシノを制御できるのは陽一さんか薫さんぐらいですよ。」

「僕制御出来てる?」

「特殊1課いち・・・いや、会社いち シノの制御が上手いと思いますよ。マジで。」

なぜか、薫と次郎は本人しのぶの横で

忍の事についてあれこれ語っているが、忍は『われ関せず』と言った風な雰囲気で

静かにコーヒーを啜っていた。

なぜ、メドゥーサ・・・。

講習会後の小話 (後書き)

どうも、忍からは超和風な『お嬢様』な匂いがします・・・。

ある日の3人の会話

「この間、友達の家で仔犬が産まれて見に行っただけですけどもう、愛くるしくて思わずギュッ!! って、抱きしめたくなったんですけど、

お前がやったら壊れるから止めろ、って触らせて貰えなかったんですよ!」

自分自身が愛くるしい仔犬の様な存在のくせに 生まれたての仔犬がいかに可愛らしかったのかを語る次郎。

それを聞きながら柔らかな笑みで相槌を打っている薫。

今は、休憩時間で部署内には薫と次郎と忍の三人しかいなかった。いつもは部屋にいる渉は陽一と二人で『視察』に出かけているらしい。

「薫さん、いつも休日は何してるんですか?」

コーヒーを啜りながら次郎が薫にそう聞くと

薫は何かを思い出すように少し顔を上げて考えてから

「うーん、本を読んだり、家でDVDの映画を見たりして過ごしている事が多いかな。」

そう答えて、ニッコリと笑う。

相変わらず笑顔が素敵な薫である。

「へえー。薫さん、本や映画が好きなんですね。」

「そう。新しいものから昔の物まで幅広くいろいろな映画を見てるよ。」

「意外と薫さんってインドア派ですよね。」

「そうだね、僕は外を走り回るより、室内で大人しくしている方が好きかな。」

「室内で大人しくって・・・暇があれば筋トレしてるくせに。」

「筋トレなんて、その場からあまり動かないんだから大人しい物だよ。」

細マッチョの薫と『脱いだら実は凄いんです』の筋肉の塊な次郎の共通点は

格闘技と云うか体を鍛える事だと思うが、不思議とその手の会話をした事はなかった。

「そういえば、シノさ。シノの好きなものって何？」

薫の入れたコーヒーを飲みながら次郎が忍にそう聞いた。

「・・・美しい物」

同じく薫の入れたコーヒーを飲んでいた忍はボソッと質問に答えた。

「う、美しい物?!」

忍の返事が予想外だったようで、次郎は手にしたコーヒーを思わずこぼしそうになるほど動揺した。

「シノちゃん、美しい物ってたとえばどんなもの？」

二人の机の近くに優雅に腰かけていた薫が優しく忍にそう聞いた。

「・・・稲光とか・・・火山のマグマとか・・・炎」

「・・・」

忍は自分が美しいと思う物を思い出しながらそう口にした。

それを聞いて普通に絶句する次郎

「・・・シノちゃんは自然に秘められた驚異的な力を美しいと思うんだね。」

さすがに言葉に詰まった薫だったが直ぐに心を取り戻す。

「・・・薫さん・・・シノをフォローできるのは薫さんしかないない」と、俺 今確信しました!!」

次郎は真剣な表情で（シノをなんとかまともにして下さい!）と訴える。

薫は苦い表情で（なんで僕に言うの?! 僕にも出来る事と出来ない事があるんだよ!）

と、小さな声で言い争っている。

切りが良かったのか、気が済んだのかどちらか判らないが、気を取り直したかのように薫が

「シノちゃんはどこか行ってみたい所とかある?」

と、忍に聞いてみたら

しばらく無言で考えてから

「・・・富士の樹海とか網走監獄とか見に行ってみたいです」

と、言って忍はコーヒーを一口啜った。

この時、次郎の中で男性・女性・忍というジャンル分けが確定した事はここだけの話である。

ある日の3人の会話（後書き）

次郎の中で忍は
性別を超越した人類が新たに発見されたみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5998x/>

特殊1課

2011年11月13日23時01分発行